
短期大学におけるエンゲージメント

--短大生の充実感・効能感の規定要因の探索--

- 堺 完 （同志社大学大学院）
- 木村拓也 （長崎大学）
- 西郡 大 （佐賀大学）
- 山田礼子 （同志社大学）

はじめに

□本発表の出発点

- ・短期大学基準協会と大学生調査プロジェクト(JCIRP)の実施する「短大生調査」のデータを使って短期大学の教育的特徴が把握できるか

【短大生調査(JJCSS)とは】

- ・ 2008年度より短期大学基準協会とJCIRPによって毎年実施
- ・ 調査票はUCLAのHERIが作成したCSS調査を翻訳した日本版大学生調査(JCSS)調査を短期大学生用に再編集したものを使用
- ・ 調査項目は学生の「基本属性」、「満足度」、「経験状況」、「価値観」、「知識・技能の獲得」、「進学動機」、「キャリア意識」など学生生活全般の情報を得るために構成

先行研究①

◆高鳥・舘他(1998)

→生涯学習社会での短期大学教育の社会的役割を再考

⇒日本の高等教育における短期大学のファーストステージ論の可能性

◆吉本他のCC研(2010)

→短期大学卒の学生のキャリア形成を把握し、短期大学の教育効果の検討(短期大学のファーストステージ論の実証研究)

• 白川(2010):卒業後の進学別にみる「満足度」や「教育の有用性」、「在学中の活動状況」の傾向分析

→満足度や教育有用性・・・「進学＞非進学」、「専攻科＞四年制大学、専門学校」、「順接進学＞非順接進学＞非進学」

→在学中の活動への評価・・・「専攻科＞四年制大学＞非進学」

⇒短大卒後に進学した学生の方が短大教育の有用性を評価し、また在学中の活動も活発で成績も良好

先行研究②

◆アメリカにおける学生研究

→学生の学習効果規定要因の探索

Kuh(2003): **エンゲージメント**

＝学習活動における学生と大学の双方の努力の質と関与
(学生側と大学側の相互のエンゲージメントが学習成果にどのような影響を与えているのかを検証)

本発表の検討課題

□短大生調査データを使用して、在学中の短大生が短期大学教育の中で何らかの教育効果（カレッジ・インパクト）を得ているのか、様々な変数との関係性を探索的に検討

⇒特にエンゲージメントが短大の教育においてどの程度重要なのか

データ概要

【使用したデータ】2009年度短大生調査

(実施時期)2009年11月

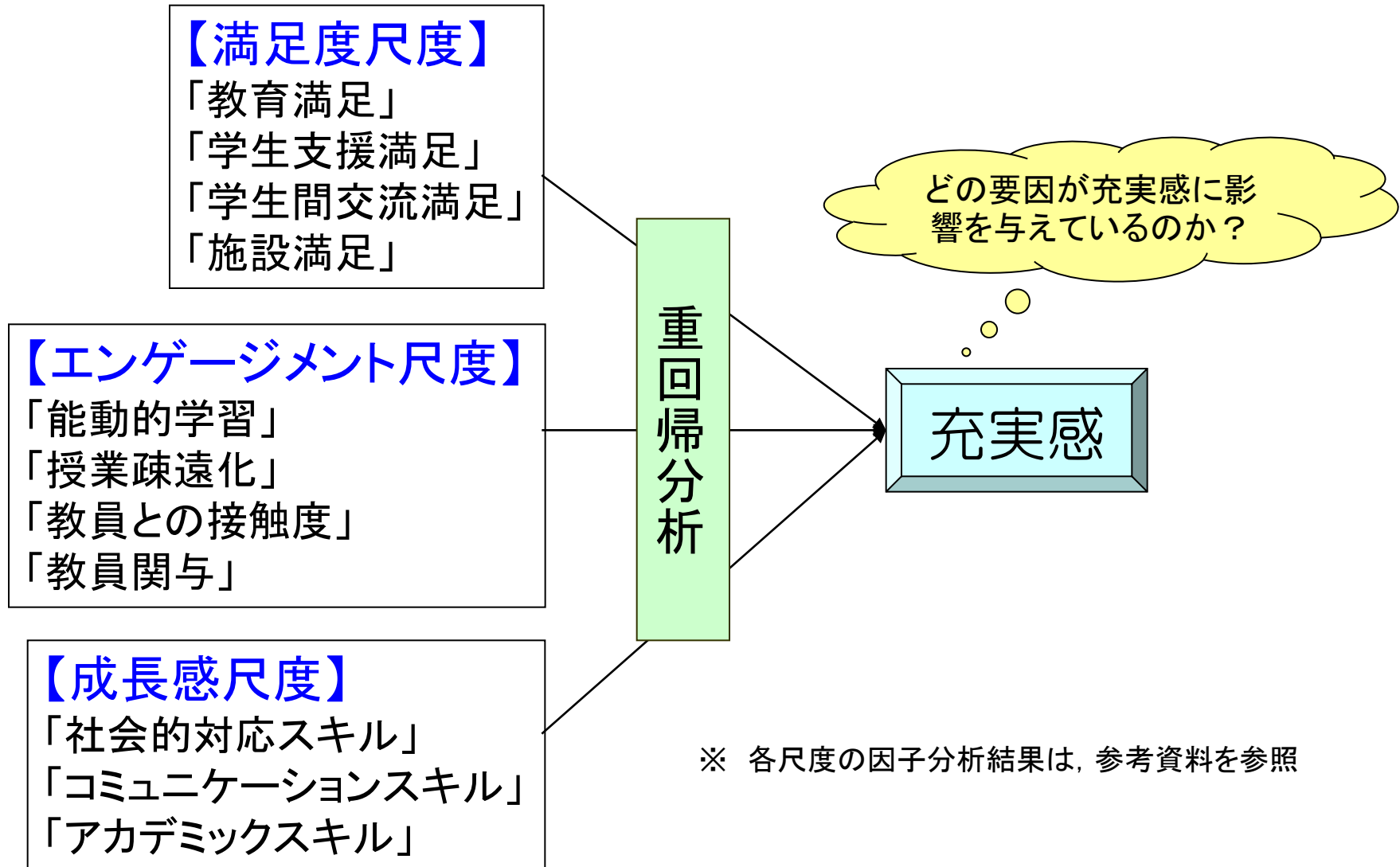
(参加短大数)協会会員校329校中30短大

(参加人数)7244人

(有効回答)7219人

(抽出法)有意抽出法

分析の視点1:「充実感」を規定する要因は?



重回帰分析(強制投入法)の結果

【従属変数】: 充実感

各要因の特徴は？(分析の視点2)

独立変数		β	有意確率
満足感	教育満足	<u>.134</u>	.000
	学生支援	.034	.032
	学生間交流	<u>.194</u>	.000
	設備満足	.024	.107
成長感	社会的対応スキル	-.067	.000
	コミュニケーションスキル	<u>.190</u>	.000
	アカデミックスキル	-.006	.692
エンゲージメント	授業疎遠化	<u>-.119</u>	.000
	教員との接触度	.048	.001
	能動的学習	.036	.006
	教員関与	.046	.002

$$R^2 = 0.25$$

分析の視点2:方法

◆ 分析1で得られた規定要因に関して、探索的な分析を実施

- 各要因に影響を与えている変数 ⇒ 重回帰分析, 相関分析
- 属性別の比較 ⇒ 分散分析

追加変数

【価値・志向尺度】

「社会貢献志向」
「アーティスト志向」
「個人的幸福追求志向」
「経済的成功志向」
「権威的志向」

【進路選択尺度】

「合理的進路選択」
「他律的進路選択」
「経済的進路選択」

※ 各尺度の因子分析結果は、参考資料を参照

属性

「性別」
「学年(1・2年のみ)」
「将来的進路希望」
(短大卒, 専攻科卒
大学・大学院卒, その他)

その他変数

一週間あたりの活動量

分析の視点2: 結果①

【教育満足】

(重回帰分析<ステップワイズ法>: $R^2=.34$)

「教員関与」($\beta=.37$), 「合理的進路選択」($\beta=.15$)

(分散分析: 三元配置(性別 * 学年 * 進路))

「2年生 > 1年生」, 「短大卒 > 専攻科卒 > 大学・大学院卒 = 分からない」

【解釈】

◆ 「教育満足」を規定する要因

- ①エンゲージメントの1つである「教員関与」が大きな影響
- ②短大進学を決定する際の「合理的進路選択」も影響
- ③属性別みると1年生よりも2年生の方がやや満足度が高い
- ④将来的な進路希望別にみると「専攻科」が最も高く、「短大卒」と「大学・大学院卒」が続く。しかし将来の進路を「わからない」とする者は教育満足度が最も低い。

分析の視点2: 結果②

【学生間交流満足】

(重回帰分析<ステップワイズ法>: $R^2=.28$)

「コミュニケーションスキル」($\beta=.28$), 「教員関与」($\beta=.24$)

「合理的進路選択」($\beta=.14$), 「個人的幸福追求志向」($\beta=.11$)

(分散分析: 三元配置(性別 * 学年 * 進路))

「女子 > 男子」, 「2年生 > 1年生」

「短大卒 = 専攻科卒 > 大学・大学院卒 = 分からない」

【解釈】

◆ 「学生間交流満足」を強く規定する要因

- ①エンゲージメントの「教員関与」と成長感の「コミュニケーションスキル」
- ②属性別では、進学時に「合理的進路選択」をした者、価値観として「個人的幸福追求志向」する者や、男子より女子、また1年生より2年生の方が満足度が高くなる傾向
- ④「短大卒」および「専攻科卒」を希望する者のほうが「大学・大学院卒」や「分からない」よりも満足度が高い

分析の視点2: 結果③

「コミュニケーションスキル」の獲得、「授業疎遠化」の背景にある学生のエンゲージメントに費やした時間の検討
(相関分析)

「コミュニケーションスキル」

- 「勉強や宿題」($r=.14$)
- 「友人との交際」($r=.15$)
- 「授業以外での教師との会話」($r=.19$)
- 「運動やスポーツ」($r=.10$)

学生のエンゲージメントの時間に関する項目とは？

「あなたは今年度、次の活動に一週間あたりどれくらいの時間を費やしましたか」の回答

「授業疎遠化」

- 「勉強や宿題」($r=-.18$)
- 「アルバイト」($r=.21$)
- 「携帯電話の使用」($r=.15$)
- 「インターネット上での友人との交流(ブログ・チャットなど)」($r=.12$)

分析視点3

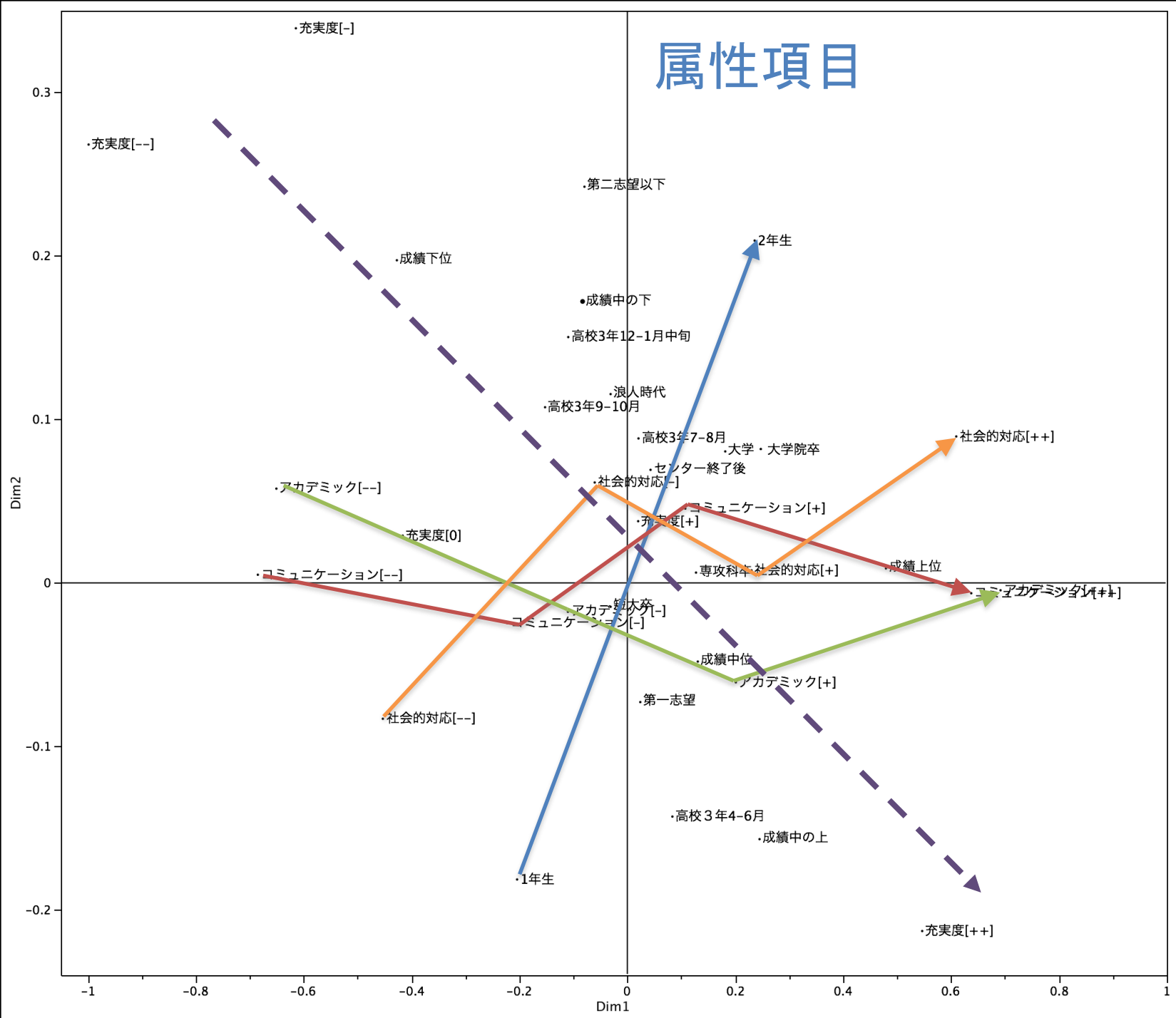
■ 学生の充実感について

- 1.「(学生自身の)学びへの関与」
- 2.「学生の学びに対する教員の関与」
- 3.「学生の達成に関するもの」

というエンゲージメントの3つの観点から、各要因との相対的な関係性を把握するため、多重対応分析を実施

分析視点3: 結果1

- 第1軸は、【成長感尺度】の「**アカデミックスキル**」や「**コミュニケーションスキル**」の高低を表す。右に行くほど成長感が上昇($\lambda=.390$ 、寄与率が.107、但し λ は特異値)。ただ、「**社会対応スキル**」だけが若干特異な布置に(第一象限から第三象限にかけて高低を示す)。
 - 第2軸は属性項目のうち「**学年**」の高低を表す。(上が2年生、下が1年生)($\lambda=.254$ 、寄与率:.045、但し λ は特異値)。
 - その他の属性項目の布置
 - ・第二象限に「**充実感なし**」、「**成績下位**」が布置。第四象限にその逆の「**充実感あり**」と「**成績上位**」が布置。
- ⇒つまり、第二象限から第四象限にいたる対角線上に左上から右下にいけばいくほど、充実感が高まり成績が上位になる。



分析視点3: 結果2

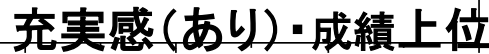
- 「(学生自身の)学びへの関与」では、第一象限に「学生の関与あり」が、第三象限に「学生の関与なし」と布置。

⇒学生自身の学びへの関与が成績や充実感と必ずしも同じ布置になっていない。

- その他の「(学生の学びに対する)教員の関与」「学生の達成に関するもの」の項目では、「教員関与なし」「学生の達成なし」が第二象限に、「教員関与あり」「学生の達成あり」が第四象限に布置。

⇒これらは成績や充実感と同じような位置に布置している。

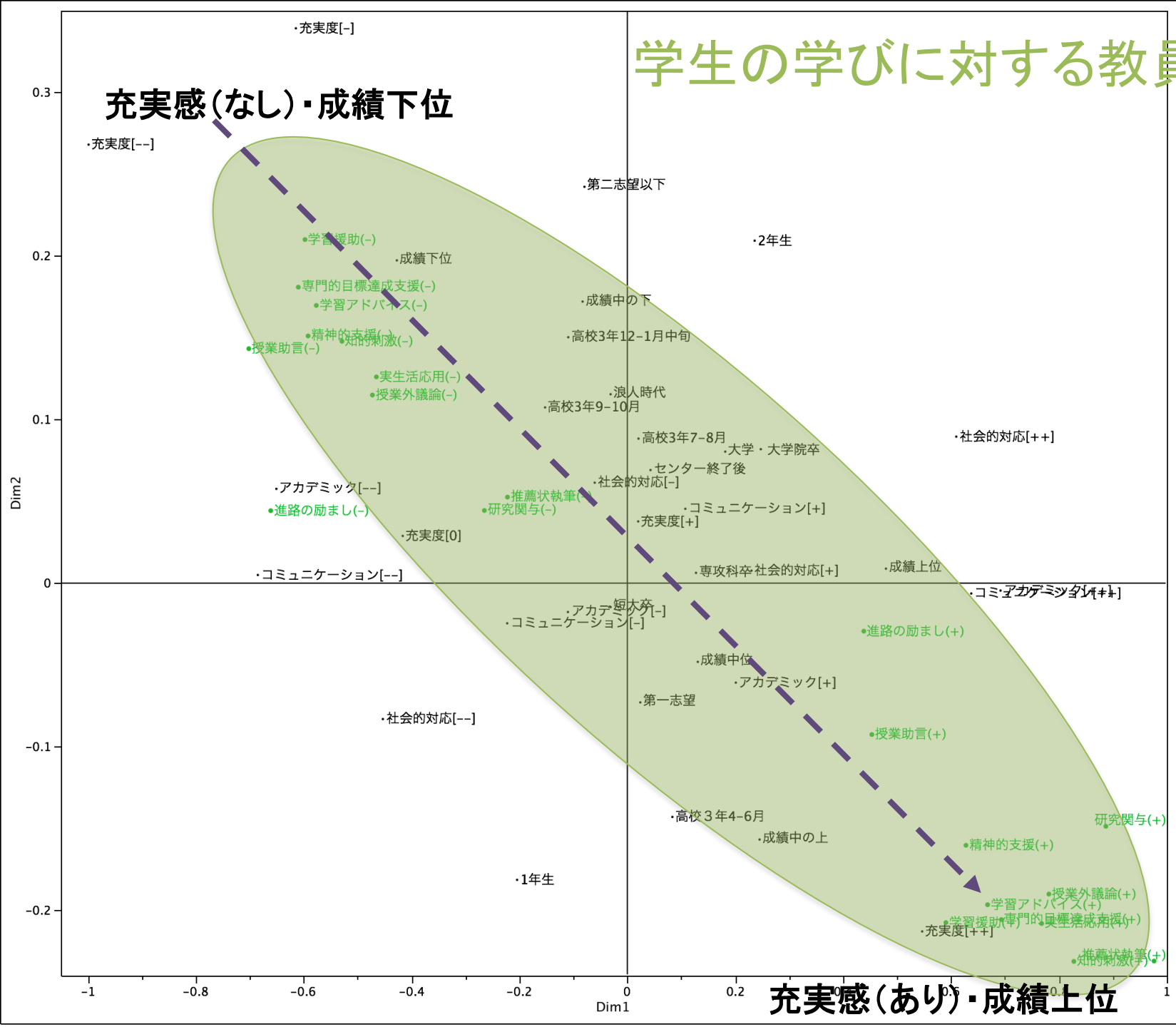
・授業でボニソニエア(A)



充実感(なし)・成績下位



学生の学びに対する教員の関与



考察①

- 分析1や2の結果：短大生の充実感は「教員の関与」の影響が大きい。
- 分析3の結果：「(学生自身の)学びへの関与」が必ずしも充実感や成績と結びついていない。
- 学年上昇で「(学生自身の)学びへの関与」は高まる一方で、それだけでは短大生の充実感が高まっていない。

考察②

□「(学生の学びに対する)教員の関与」が短大生の充実感、そしてその結果としての成績と対応している。

⇒「教員」というファクターが短期大学にとって重要。この関与が充実感や成績に作用し、専攻科や大学・大学院などへの進学意欲を喚起する可能性あり(※2・3番目の図より)。

□大規模校に比べ短期大学は「教員への親近感」を促す密接なコミュニケーション環境が用意され、その結果として「社会的対応スキル」を高めている可能性がある。短期大学独自の「教育力」の規定要因として「教員」要因は注目に値する。

今後の課題

- 短期大学のエンゲージメント(特に教員の関与)を通じて、短大生が卒業後に進学といったセカンドステージへと至るには、いくつかのパターンやステップがある？
- 今後このパターンやステップを他の要因や手法を用いて継続的に検証する必要がある!!

参考文献

- 高鳥正夫、舘昭編1998:『短大ファーストステージ論』、東信堂
- 短期大学コンソーシアム九州2010:『短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』
- Kuh,G.D."What We're Learning About Student Engagement from NSSE."
Change,2003,35(2),24-32.
- Kuh,G.D."The National Survey of Student Engagement: Conceptual and Empirical Foundations." *NEW DIRECTIONS FOR INSTITUTIONAL RESEARCH*,2009,no.141,5-20
- 舘昭編2002:『短大からコミュニティ・カレッジへ 飛躍する世界の短期高等教育と日本の課題』、東信堂
- 伊藤順啓 1991:『短期大学の社会学』、国際書房
- 伊藤順啓 2000:『短期大学教育再考』、国際書房
- 小方直幸2008:「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11、45-64.
- 財団法人短期大学基準協会・JCIRP短期大学学生調査チーム(研究代表:山田礼子)編 2009:『短期大学学生に関する調査研究—2008年JICSS調査全体結果報告』1-91.
- 財団法人短期大学基準協会・JCIRP短期大学学生調査チーム(研究代表:山田礼子)編 2010:『短期大学学生に関する調査研究—2009年JICSS調査全体結果報告』1-82.

ご清聴ありがとうございました